

ヒューマンコミュニケーション論文特集の発行にあたって

ヒューマンコミュニケーション論文特集編集委員会

委員長 竹内 勇 剛



人とテクノロジーとりわけ情報通信技術との関係は、より一層強固なものになりつつある。だがその一方で、人の認識や意思決定、行動に対してどこまで関与していくことが適切であるのか、人の主体性をどのように尊重していくべきかなど、情報通信技術が単に人にとって便利なモノであったり、求める豊かさを与えるモノであったりするという役割“以外”での価値とその取り扱いに関しては、未だ十分に議論されてきたとは言えない。

電子情報通信学会におけるヒューマンコミュニケーショングループ（HCG）は、そのような人と情報通信技術との関係を探究する研究領域として、現在4つの第一種研究専門委員会を中心に活動している。ここでは心理学や認知科学、言語学、社会学、文化人類学、倫理・哲学、教育、子育て・養育、医療・福祉など“人”と密接に関連する分野で活躍する人々も多く携わっている。HCGはソサイエティとは異なりHCG単体での会員登録制度はないため、全会員は少なくとも1つのソサイエティに登録した上でオプショナルにHCGにも登録する形をとっている。結果としていわゆる情報通信技術に関する工学系の研究を軸足とした人々もHCGで活動していることになる。そのためHCGは幅広い分野を網羅する多様性を有したコミュニティとして、電子情報通信学会の各ソサイエティだけでなく、国内にある多くの学術団体の中でも大変ユニークな存在となっている。

ところがこのユニークさは、HCGでの議論を踏まえて論文を執筆し、投稿しようとする段になってある問題を引き起こしてしまう。果たしてこのような幅広く多様な専門性に裏付けられた論文を適切に査読して

くれる論文誌はどこの学会にあるのだろうか、と。残念ながらHCGは各ソサイエティとは違い固有の論文誌を発行しない。また各ソサイエティが毎月発行している論文誌は、基本的には工学系の論文を中心に取扱いしており、HCGがスコープとしている研究内容に対して質の高い査読が行える保障は乏しいというのが現実だといえよう。

そこでHCGではこのような現実を踏まえ、定期的に本会和文論文誌AとDの誌面を隔年でお借りして、毎年1回「ヒューマンコミュニケーション論文特集」をいずれかの論文誌において企画し、上述のようなHCG固有のユニークさを生かした論文を投稿する機会を設けてきた。更に3年前からは、HCG内に本特集号を継続的に企画する編集委員会を常設化し、投稿されてきた論文1編1編を精読し、より安定した形でその論文がもつ学術的価値を尊重した査読・編集作業を押し進めることを目指している。

今回の「ヒューマンコミュニケーション特集号」では、25編（うち2編はレター）の投稿があった。そして最終的には、1編のレターと7編の原著論文が採録という結果になった。この結果は、近年の「ヒューマンコミュニケーション論文特集」では比較的低い採択率だといえる。しかし本特集に投稿されてきた論文の質の低下がこの結果を招いたわけではないと思う。むしろ全体的な傾向としては、本特集を企画する編集委員会がHCG内で常設化されてから投稿されてくる論文の質は向上してきている。しかしそれゆえに、論文に記述された研究内容に対して期待される水準も同様に向上したため、相対的に査読もリゴラスになる傾向が強まったのも確かである。であるが本特集において重

視している点は、1. 研究における問題設定・着眼点・コンセプトの新しさ、2. ヒューマンコミュニケーション分野を進展させる有用な知見の有無、3. 既存の研究・製品・サービスに対する研究の有用性・新規性の位置付けの明確さ、という3点であり、採録された論文はいずれもこれらを十分に満たしていると判断されたものになっている。加えて本特集では、研究分野の性質上、統計的な処理が困難な少数の実験参加者からなるものや、会話分析にみられる定性的研究、ケーススタディなど、ほかの論文誌では一般的に採録されづらい論文であっても、今後のヒューマンコミュニケーション研究の発展に寄与することが期待されれば積極的な姿勢で受け入れることをポリシーとしている。そして何よりも、本特集は前述したとおり、HCG固有のユニークさ、すなわちヒューマンコミュニケーション研究のダイバシティを尊重し、多彩な分野・領域にわたる多様な価値観を共有することを通して、ヒューマンコミュニケーション研究及びHCGの発展を目指すことを目的としている。

今回のヒューマンコミュニケーション論文特集で残念ながら不採録となってしまった投稿論文の中にも、非常に有意義で興味深い研究が多くあった。ただ惜しむらくは、今回の場合は電子情報通信学会の査読手続きを著者の方に十分にご理解頂いていなかったのではないかと推測される“条件付採録に対する回答文”と“修正原稿”の筆致が散見された点である。電子情報通信学会ではいずれの和文論文誌も「照会后判定」という手順はなく、特に（1回目査読時に）「条件付採録」として取り扱われた論文に対する判定は1回のみであり、そこでの判定結果は「採録」あるいは「不採録」のどちらかしかないため、1回目査読の判定結果の際に筆者に提示された「採録のための条件」に対する対応が不十分であると判断されると「不採録」と判定し

なくてはならない。しかしすでに申したとおり、たとえ不採録となってしまった論文であってもその研究の価値を低く評価したのではなく、非常に興味深く積極的に採録にしたいと考えた論文であっても、手続き上そのような判定結果にしなくてはならなかったことについてご理解頂きたいと思う。そして、2回目の判定通知の中で「再投稿」を促されていれば、判定通知文中の不採録理由やコメントを参考にその論文を再度修正して頂き、ぜひ再投稿をして頂きたい。ただし「ヒューマンコミュニケーション論文特集」は年に1回の企画であり、来年は和文論文誌Aでの投稿募集となる予定である（2021年2月発行予定）。そのため、それ以前に再投稿をなさる際には、本学会の再投稿に関する手順に準じて頂くことで、前回の査読結果が当該編集委員会において参照されるようになっているのご活用して頂きたい。

最後に、本特集は多くの方々の御尽力により成立した。本特集に御投稿頂いた方々、査読、編集に取り組んで頂いた編集委員及び査読委員の皆様には深く感謝する。とりわけ編集副委員長の小森政嗣先生、編集幹事の近藤一晃先生、坂本隆様、新井田統様には、限られた時間の中で丁寧に公正な編集作業を進めて頂いた。多大な御尽力を頂いたことに改めて深く御礼申し上げます。

たけうち ゆうごう 竹内 勇剛（正員） 1999年名古屋大学大学院人間情報学研究所社会情報学専攻博士後期課程修了。博士（学術）。1996年11月から2001年3月までATR知能映像通信研究所の研究員として勤務。2001年4月静岡大学情報学部情報科学科に講師として着任。2002～2003年ATRメディア情報科学研究所の非常勤研究員。現在、上記学科の教授。認知科学を基盤としたインタラクション研究に従事。2016年本学会ヒューマンコミュニケーショングループ運営委員長。ACM、日本認知科学会、人工知能学会、ヒューマンインタフェース学会、情報処理学会各会員。

ヒューマンコミュニケーション論文特集編集委員会

委員長	竹内 勇剛
副委員長	小森 政嗣
幹事	近藤 一晃・坂本 隆・新井田 統
委員	安藤 英由樹・繁 榊 博昭・石井 亮・寺田 和憲
	松田 昌史・宮崎 慎也・塙 大
	道満 恵介・永井 岳大・酒向 慎司・藤田 和之
	塩野目 剛亮・馬田 一郎・坂井田 瑠衣